一、胎芽的利潤の現実化

ここでは、販売の対象を含めである。うるし、山形県新山地方（旧羽州村山郡）の平野部の
すべての村に広範に成立した赤花生産地帯である。赤花は古く楽色用・化粧用・薬用等のために生産されながら、

江戸初期からは、とくに絹織物の染料として京都の西陣に移出されていた。赤花は京都の問屋から紅屋・赤染屋

二、農業生産における商品化の展開

本稿はこうした意図をもつ研究のうち、流通過程を扱っているにすぎない。第一節と第二節は全体のなかでの

否に意味するのではない。それにもかかわらず明治期の所産とされる「地主制」（地主ではない）の基礎を、

位置を示し、見通しを与えるものとして附されたものである。それらは別稿で詳述することにした。流通過程


を通じて繊物に使用されたのである。紅花の栽培には、かなり早くから菜種粕・菜種粕・焼酎粕・米糠等の購入肥料が入り、その摘花期には自家労働では不足し、賃銀支払形態をとる家関係を通した手伝いのほか、多数の日雇群が形成された。また、除草にも季節雇を五人入れた家もあった。同時に紅花の生産は、ただ栽培に限らず、摘取した花は生花を加工する干花製造を随伴するのであるが、これが著しく季節的で短期間に限られるとはいえ無視出来ない農村工業となっていた。この過程は、江戸中期には問屋・商人による加工であったが、幕末期に近廻し、農村内部に自家労働を主とし他人労働を入れた干花製造が渗漫し、商務に占められていた加工過程を圧迫した。この加工過程では稀にその作業過程別に女子供まで使用する。月雇労働による協業の態様を示すのが生じた。

紅花生産、一般的に商業的農業のかかる展開は近世封建社会のもつ必然的側面であった。その社会がともかく実化の可能性が示された。こうした事態の発生は領主の封建的租税体系を変質させずにはおかない。問題は農
民の手元のこの余剰部分をどのように生産把握を示したかにあつ。江戸時代の商業的農業はそ
れがたが、生産的利潤を残し得た点で、封建社会を否定する契機の起点を与えたといい得るであろう。しかしこ
て封建的危機の深さを知り得るであろう。それゆえ、貨幣経済の滲透による農民層の分解も封
建的生産の場の本性 "農民の自立的商品生産の程度に依存するものである。この具体的な検討を通じてみて、はじ
て封建的危機の深さを知り得るであろう。それゆえ、貨幣経済の滲透による農民層の分解も封
建的生産の場の本性 "農民の自立的商品生産の程度に依存するものである。この具体的な検討を通じてみて、はじ
て封建的危機の深さを知り得るであろう。それゆえ、貨幣経済の滲透による農民層の分解も封
建的生産の場の本性 "農民の自立的商品生産の程度に依存するものである。この具体的な検討を通じてみて、はじ
て封建的危機の深さを知り得るであろう。それゆえ、貨幣経済の滲透による農民層の分解も封
建的生産の場の本性 "農民の自立的商品生産の程度に依存するものである。この具体的な検討を通じてみて、はじ
て封建的危機の深さを知り得るであろう。それゆえ、貨幣経済の滲透による農民層の分解も封
建的生産の場の本性 "農民の自立的商品生産の程度に依存するものである。この具体的な検討を通じてみて、はじ
て封建的危機の深さを知り得るであろう。それゆえ、貨幣経済の滲透による農民層の分解も封
建的生産の場の本性 "農民の自立的商品生産の程度に依存するものである。この具体的な検討を通じてみて、はじ
て封建的危機の深さを知り得るであろう。それゆえ、貨幣経済の滲透による農民層の分解も封
建的生産の場の本性 "農民の自立的商品生産の程度に依存するものである。この具体的な検討を通じてみて、はじ
て封建的危機の深さを知り得るであろう。それゆえ、貨幣経済の滲透による農民層の分解も封
建的生産の場の本性 "農民の自立的商品生産の程度に依存するものである。この具体的な検討を通じてみて、はじ

tます紅花栽培上の技術的制約は上畑でなければならないこと。連作を嫌い二三年作付を変えることがあつ
る。これは特に、五穀の販売価格が安定した市場でなかつたことを指摘しておかなければならない。四、五畑の経営が
多く一反以上はかなり大きな農民に限られている。通作・普通価格の変動が激しく安定した市場でなかつたことを指摘しておさらに得ないのである。厳密には反則購入肥料・日雇賃銀の現金取支を行ぶべきである。

この売代品金は勿論貯蓄資本頭等に充てられたが資材の購入にも当てられたが資材の購入にも当てられたが資材の購入にも当てられたが資材の購入にも当てられたが資材の購入にも当てられたが資材の購入にも当てられたが資材の購入にも当てられたが資材の購入にも当てられたが資材の購入にも当てられたが資材の購入にも当てられたが資材の購入にも当てられた。更に
こうして獲得された貨幣が土地購入に向けられ一貫して経営を拡大している例もある。ともかく紅花生産が、農

民層をますます商品経済にまきこんできたことは事実であった。そして、その余剰金が誰の手に残ったかに問題
あるにせよ、農村に蓄積されつつあったことも事実である。

評（一）この地方の紅花に関しては、すでに田村氏『東野紅花史料』（日本常民文化研究所彙報第577）があるので、

全般的な事実は同書に掲げられている。本稿もまた史料の点で、同氏の御好意によるところが極めて多い。

三、西山村郡西根村冲津常太郎氏よりの聴取。沖津家の実例による。

（四）「山形家譜」（山形家経済志料）第一集付録三九（四四頁）及び「谷地町大町念佛講帳」（今田信一氏稿）明治三年の項。

二、領主の対応形態

紅花生産の如上の展開に対する領主の対応は、まず農民よりの剩余生産物の直接的収奪を意図するものとして表われる。しかし、この生産を領主が直接掌握し得ないときは、流通過程から間接的に剩余部分を把握しようとする。この両者は分ちがたく絡みあってさまざまな形態のなかに領主的対応の歴史的過程を作っている。

村山地方の村明細帳は、内永頃から小物成としての畑役を幾つか記載している。しかしそれは茶畑・漆等であ
「耕地に紅花畑作付が、全く見出せない。むしろ始め種を伴う青樺役を負担していた「土地」が紅花作付に変
ついていても、ものまるの青樺役をなめている例がある。これで小物成設定当時は青樺の販売を前提とし、作
付の変化により、他方では価格値低の下落に伴って、実質的に封建貢租たる意義を低下させてゆくのである。
しかし藩が紅花畑作付を賦課しないかったことには、直ちに藩の対応がなかったことがわかる。藩
は、享保以降紅花栽培の奨励がみられる点に与えられる。この地方の紅花奨励の史料の初見が享保期であること
は偶然としても、ほかならぬこの享保期が封建的危機への対応として強率定免制をもって登場してくることを考
えれば決して無縁ではあり得ない。『地方凡例』に、
『火七品（四木三章）上産石盛二二上石産三附砲有……然レモ右述如く享保以来新田御制目二、植物
時ノ儀、石盛地方にダルニヨリ、裁物ノ不拘地味ノ善悪ノ随ヒ位相応ノ石盛定メシ』
とあるが、これは個々の商品化作物に対してそれぞれの収益に課税する方式及び移行したことを物語る。これは、一方では現物貢租の形をとらない畑
物の商品化、他方では水田生産力の増進に伴う農民の米穀販売。この二様の余分部分を、本租とくに現物米の形
で一括把握しようとしたものである。こうした貢租体系ができるとともに四木三章を中心とする全国的な国産米
（中略）

(1) お酒飲む

(2) に行こう

(3) 彼女に会おう

(4) 彼女に会わな

(5) 彼女と会う

(6) 彼女と会っ

(7) 彼女に会っ

(8) 彼女に会

(9) 彼女に会お

(10) 彼女と会

(11) 彼女と会

(12) 彼女に会

(13) 彼女に会

(14) 彼女に会

(15) 彼女に会

(16) 彼女に会

(17) 彼女に会

(18) 彼女に会

(19) 彼女に会

(20) 彼女に会

(21) 彼女に会

(22) 彼女に会

(23) 彼女に会

(24) 彼女に会

(25) 彼女に会

(26) 彼女に会

(27) 彼女に会

(28) 彼女に会

(29) 彼女に会

(30) 彼女に会

(31) 彼女に会

(32) 彼女に会

(33) 彼女に会

(34) 彼女に会

(35) 彼女に会

(36) 彼女に会

(37) 彼女に会

(38) 彼女に会

(39) 彼女に会

(40) 彼女に会

(41) 彼女に会

(42) 彼女に会

(43) 彼女に会

(44) 彼女に会

(45) 彼女に会

(46) 彼女に会

(47) 彼女に会

(48) 彼女に会

(49) 彼女に会

(50) 彼女に会

(51) 彼女に会

(52) 彼女に会

(53) 彼女に会

(54) 彼女に会

(55) 彼女に会

(56) 彼女に会

(57) 彼女に会

(58) 彼女に会

(59) 彼女に会

(60) 彼女に会
三地主——小作関係の展開
商品生産の展開に伴う「農民層の分解」は、近代化の起点としてまずおかれ
べきことであるが、日本におけるこの分解の指標となるべきもを統計的に把握することはかなり困難である。通
常、この分解の指標として所有石高の階層分化（或いはもっと大雑把に本百姓と小百姓との分化）がとられること
があるが、土地に関する諸々の法令は表高を著しく実態とかけ離れたものにしている。例えば、地主の領主的制
限の反抗として現れた高級質地の普及は、一ケ村「困難之小前」のなかに、二十石以上の人、十石以上四
人、五石以上五人、三石以上一人的、無高になしというように、最高三十八石の者をさえ含んでくるのである。
是の分かれる所有が分化していることが何らの意義を持ち得ないのではなく、分化すること自体に階級の要素があるに
限らないが、所有高での上層・下層が直ちに階級関係を示すものではないそれもある。
地主小作制に関連して自作地と小作地の比率である。勿論ごく一般的な分析には階層分析の様相を示しておこ
りの表からもわかるように、明治十七年にすでに紅花地帯は著しい小作化の程度をみせている。勿論、地租改
正後の分解が加わっているから、この数値をそのままそのまま幕末に移していくことはできないが、幕末にこうした進
歩の前提条件が熟していたことがわかるであろう。
山形県自小作田畑・戸数比率（明治17年）

<table>
<thead>
<tr>
<th></th>
<th>自作100地に対する小作地</th>
<th>農家の中比率</th>
</tr>
</thead>
<tbody>
<tr>
<td></td>
<td>自作</td>
<td>自小作</td>
</tr>
<tr>
<td>紅花生産地帯</td>
<td></td>
<td></td>
</tr>
<tr>
<td>東村山郡</td>
<td>110.8</td>
<td>24.7</td>
</tr>
<tr>
<td>西村山郡</td>
<td>158.7</td>
<td>18.7</td>
</tr>
<tr>
<td>南村山郡</td>
<td>34.0</td>
<td>45.5</td>
</tr>
<tr>
<td>北村山郡</td>
<td>102.2</td>
<td>21.0</td>
</tr>
<tr>
<td>米作地帯</td>
<td></td>
<td></td>
</tr>
<tr>
<td>東田川郡</td>
<td>71.9</td>
<td>34.7</td>
</tr>
<tr>
<td>西田川郡</td>
<td>68.0</td>
<td>44.6</td>
</tr>
<tr>
<td>飽海郡</td>
<td>53.0</td>
<td>22.3</td>
</tr>
<tr>
<td>山間田畑地帯</td>
<td></td>
<td></td>
</tr>
<tr>
<td>最上郡</td>
<td>18.0</td>
<td>66.0</td>
</tr>
<tr>
<td>東置賜郡</td>
<td>44.0</td>
<td>62.2</td>
</tr>
<tr>
<td>西置賜郡</td>
<td>14.1</td>
<td>66.9</td>
</tr>
<tr>
<td>南置賜郡</td>
<td>14.2</td>
<td>77.5</td>
</tr>
<tr>
<td>県平均</td>
<td>57.0</td>
<td>38.4</td>
</tr>
</tbody>
</table>

（「山形県農地改革史」P.19〜P.20による。）
商品生産の生産関係における地主-小作への手懸りが与えられるのであろう。次節においてこの手懸りを一応生産者者の紅花販売の点で推測しようと思うが、商品生産が具体的にいかなる場において行われたか、とくにそれが完
全な社会的分業とならず、基本的に貢納のための米穀生産をついている封建的共同体のなかで示唆的なるものを含まれている。

（二）中村吉治教授の下で行われた「封建的村落共同体の研究」すでに発表されたものは左の通りである

商品-貨幣流通の上に立つ・自立的な貨幣財産する商人資本が、自らが媒介していた諸極に対して分解作用を及
前期的流通の構造

一 紅花生花市

生花市は、農民の手元で生産された紅花が、流通市場に流入される経路を結ぶ点にある。市は、山形市の七日町・十日町のもので加工されていないようである。実際にには深夜に及んでいたようである。「山形雑記」によれば、

『半夏一咲と申で無間違咲くノ夫は三日以内に咲揃を見せてサンペと申で町方やホテイ籠を昇り数人買いに入込、右文賢の

江戸中期における商品流通をめぐる対抗（安孫子）

八一

とある。また『東国旅行談』にも、
朝に摘み取ってこの町の花市に持ち来てお金を換物するという所見に米谷町の紅花を寄贈する

こうした例を挙げよう。

困窮の百姓が共年々紅花種を待て無奈にすれば長年持つ者を守るための手段がなければならぬ。}

売した代金が、貢納・夫食金返済・借金返済・仕切勘定に向けられたことを示す史料も多い。二三の例を挙げよう。

ここで売手である農民はいかなる人員戦で散々な農民が取引する農民がいかなる農民の側を検討してみよう。それは、生産過程の検討を仮たなければならないということである。それは逆にいえば、自分の経営地で作った紅花を、すべてその個々の農民が販売したのであろうかということである。農業の労働過程、それはあらゆる新たな契約、エラルキーや組合など、あるいは各々の生産が行われていることについての指摘は数多くあるが、そうしたさまざまな契約によって共同体が拡張されていることを示している。
にみられる単位より小さく、且、オヤカタに対する依存度の強い家に限られることは想像し得る。それは商品化し得るということだが、日雇等を入れる可能性となって、オヤカタへの疎絶度を弱めていくことを意味する。こうした販売面における家の関係は、直接的に史料で明かにすることが困難であるが、紅花摘取目録の類にはこれを推測させるものが多い。

善兵衛

表紙

紅花摘目方覚帳

次郎

（中略）

日方三十六貫三十目

三貫百文

銭三貫九百四十五文

（表紙）

善兵衛

留次郎

江戸中期における商品流通をめぐる対抗（安孫子）

八三
即ち、この覚帳は紙に記された善兵衛の名のもとに藤兵衛・留次郎の摘花目方（内容は毎日記録されている）と代銭が記されている。しかも、生産量から見て格段の差違がある以上、前とその後の間に明瞭な差があることとし、長助百目であって源右衛門がやや不格段に大きい。この二つの事例は、何故に藤兵衛以下のものが販売代金の大きい家の記録に入っていたかという問題を投げかける。そこで仮に販売代金が全額藤兵衛・源助等に渡っただけである。それによれば、江戸時代の農民・即ち本百姓とは本来そういうものだったともいえる。
二山形の問屋商人
村山地方より京都に移出する問屋は、江戸時代中期までには都市商人に限られていたようである。諸種の史料より山形に居住した問屋は三十四軒を数え得る。これらの問屋は、直接に農民より買入れるにつけ水玉花と称する形に丸めて問屋に渡していた。問屋はこれを加工して花餅や干花を作り京都に送ったのである。

仲買人である目早は、単なる仲買人ではない。実は仲買は二つに区別される。一つは旧来から株仲間を作って問屋については次項にゆずることとする。このように都市に発生した仲買は、本来問屋の手代の役割しか果たし得ないものである。その活動は次ぎのようにいわれる。

一：于山形先々に早市下宿候のもと凡二十人程を従者候而荷主之手先相成之方出来たし荷主共相互荷数冊之多少結びさせる様相成居候趣
二：早市卜者荷主之手先相成相成相成相成

このような目早は、すでに寛永期（一六三〇年代）に取次渡世之者百有余有近在中江州路諸品之高下之見合売販に

江戸中期における商品流通をめぐる対抗（安孫子）

八五
仲間の定と変わるところはない。この限りでは全く問屋に従属した仲買のようにみえるが、問屋に対してなお独自
性を有していたことは、元文三年（二三一）山形の紅花問屋が藩に要望書を提出して、
「置き花」を停止してほしいということである。即ち目早の力は、
はや問屋側が抑え得ないほどに
であって、問屋という目早といつても、同じ基礎に立って流通から利潤を取つており、
飛出する仲買との対抗と異り同質の商人資本として評価しなければならない。
さて地元山形における典型的な商人資本であった紅花問屋は、
如何に評価できるであろうか。勿論「前期的商
人資本」という規定は当然であるが、より積極的に商品生産に対処する前期的資本の方向を
尋ねておる農民の加工を商人資本が切り離し、生産過程の一
部を自らの機能の内へ含んで来たものと考える方が妥当であろう。この地方において当初より農民の加工
が存在しなかったとしても、それはその段階（紅花生産の開始期）にすでに商人資本が存在する
ということから、加工過程を組
み合わせて考えるべきである。問屋を加工の農民手元に売り上げたかに
てもこの加工過程が、約一ヶ月で完了し、また特殊な職人の技術を必要しないところから、
比較的簡単に商人資本
以上の過程が考え得るものであるが、商人資本のこのような推進は、展開していく商品生産への対応・究極的意図は、如何に取扱われるのでであろう。問屋は、奉公人及び日雇の労働によって、少なくともこの加工過程に関する限り部分を生産の過程に付き入れる。したがって、栽培そのもののが行われ、栽培そのもののが行われたとみられる。品質確保に、熟花斗摘取未熟花摘取不申申した紅花問屋の内、高利貸しを拡げるべき、適当な史料をもたないが当方では月利拾五両に害分とされ、京都の紅花問屋から三拾両壹分の申。佐藤利兵衛、福島治助、長谷川吉郎治、村井清七、立付米、一五八俵三斗七升九合、一九九俵二斗四升二合、三二○俵一斗九升八合、一五俵三斗一升四合。
は商品生産の把握を示すものである。しかし、この過程は、商人、資本にとつって必ずしも順調でなかった。それは
次節で述べるよう、農村内部にもこの過程が進行したことによる。「生産的共同体の内部」における条件の成
熟は、商人資本に対するよりも農村内部での商人「地主化」の道を進めるに、一方では動揺する藩権力の支柱として編成されることに一層有利に働いたのである。

続く役であった。紅花荷役は他国移出の際に課せられたのは紅花荷役であり、ただただ一例に過ぎないが生花取引に課せられた
ばならない。直接、流通面に賦課されたのは紅花荷役であり、ただただ一例に過ぎないが生花取引に課せられた

文九年（一六六九）
－三三貫 金壺分と五百文

明和三年（一七六六）
－三三貫 金壺分永式拾文

－三三貫 金壺分永式拾文

－三三貫 金壇分永式拾文

－三三貫 金壇分永式拾文

－三三貫 金壇分永式拾文

－三三貫 金壇分永式拾文

－三三貫 金壇分永式拾文

－三三貫 金壇分永式拾文

－三三貫 金壇分永式拾文
ことは当然である。しかし、紅花生産における農民出身の仲買が出るには、生産上の一つの変革が必要だったよう

にみえる。それは史料的に、在郷仲買の存在が、農民の干花製造の展開と時期を重ねて表われることである。

価格の不安定と時間的制約から仲買に入る余地はなく、その日その日に売りねばならずその日のうちから加工をはじめ、花の販売では、
じて仲買が登場するのである。仲買は、初期にはそれ自身が少量の干花加工者であったものが、一般農民の干
花製造とともに、純然たる仲買へ変わっていったものである。

江戸時代の干花製造が農村内部で行われるようになった時期は必ずしも明確ではない。しかし、安永元年の記録は次ぎ

のように干花製造の未展開を伝えている。

-most of the text is not visible or legible due to the condition of the image. the text was cropped and not fully visible.
この購入量は一軒の農家の紅花栽培として極端に多過ぎる。十兵衛以下の者は、おそらく生花を購入してこれを加工して壊米家に売渡したものか、あるいは自らが仲買人として、個々の農家の製造した干花を買集めたものかのどちらかである。もし前者があるとすれば、特に十兵衛、彌之助のように乾燥量の多いものは、家族労働（奉公人を除く）だけで行い得ず、相当の奉公人をもつか、あるいは日雇労働に頼って、自ら買入れた生花を加工して販売する。「小商品生産者」であったと思われる。また仮に単なる仲買にすぎないとしても、名目を名乗る（地名を示したのが出ており）ことは、すでに一般農民が干花製造を開始していなければ現れないものである以上、安永元年（一七二）から文政五年（一八二）までの五十年間に干花製造が農村に浸透したとみられる。安永や文政期のこうした傾向は、天保以降の諸史料に数多く見出されるので、一部の上層農民が行っていたことも想像できる。

江戸中期における商品流通をめぐる対立（安孫子）

在郷仲買を意味する史料は天保期を下るかかなり数多く見出される。農村に西里村に居住する紅花商人本木林

九一
兵衛家の弘化五年の仕入帳を摘記してみよう。

一月二日
戸花四貫二百四十九文
金七两廿分銭四百文

二貫二百八十一文

二十四貫百六十九文
金三十九両

三貫文

銭五百文

新兵衛

三貫両

松兵衛

文助

重三郎

（以下略）

ここですぐ注目されるのは、高谷村の新兵衛の三十九両である。千花二十四貫というのは、紅花栽培面積に直

集められた、干花で貰い集めたかは不明瞭にしか得ないが、この時期に至れば個々の家が干花をも作るに至っているこ

とは、新兵衛以外の家の干花量が丁度自家栽培の規模に相応するということである。即ち清六は一反級で富農における
紅花栽培面積に相当し、平右衛門・文助は五、六畝であって、ほぼ一般農民級に該当するのである。こうした直
紅花を大きく取扱った農村内部の商人は、いずれもこのような地主化過程を辿っている。そしてとくにこのよ
うな大地主に成長するのは、仲買的商人ではなくて京都へ荷送りする間屋商人であることは注意される。農村内
部に出て来た商人が、最初いかなる形で紅花問屋を始めるかを考察してみよう。青柳家においても紅花を仕入れ
るときは、その資金を他から調達しなければならなかったといわれる。千花一鉄三十二貫の価格は、地元山形の
三、三両、寛政期四十二年、三両、文化・文政はやや下落し、天保期には五十両位となっている。このように極め
て高価なものであるため（米価は天保期で一分一朱位）二、三鉄発送するとしても大きな負担になっていた。こ
の事例を挙げよう。これは前に引用した松橋村塚家家の「紅花販目録」である。
以上の文を省略し、掲げたのは、ここにみえるように、資金に乏しい問屋の調達法をみるためにある。堀米家は先に申し述べたように、名主であるが、屋敷を町と称した問屋でもあった。しかし、紅花発送の資金不足は明瞭であつて、このため紅花仕入金その他の荷役金・運搬等を吉田藤兵衛から融通して貫い、同時に半額は藤兵衛の出資とすることにあります。
している。吉田藤兵衛家はどういう家かわからないが、商業町谷地町に吉田姓を名乗る紅花問屋があるのである。

いは谷地の問屋かもしれない。堀米は藤兵衛から借りた自分の出資額五拾八両を六度にわたって返済しているのである。堀米家が出資額の大半である五十五両を二十日間で返済したにも拘わらず、まず借りなければならなかったところにその勇さが窺える。しかしこの注意すべきことは、借りをしても、また出資の半額を他に求めてもならない。この上昇期の農村商人と前期的商人資本との対抗関係を読みとることができることがである。この対抗関係は、直接に株仲間の廃止を要求し、或いは拔売として対抗しつつ新たな自由な市場を求めて闘いとして現れる。個々の家の貨幣経済化が、同時に農民層の分化を促進し、個々の家の中経済の分化が一般化した時期と重なる。このことは、新しく展開しあつて、先に述べた半沢家、青柳家の場合、地主として急激に成長して来るのは、いずれも文政・天保期で、花生産が、漸次個々の直接生産者の自立化をひき起こし、個々の家の中経済の分化が、土地所有の分化を促進し、土地所有の階層分化として現われた結果と考えられる。地主所有の分化は単なる農民層の分化に終わるのではなく、土地所有の分化が、土地所有の分化の底を深深と刻むものである。しかもこうした農民層の分化の過程の中に、土地所有の分化として現われる。
京都の紅花問屋

京都の紅花問屋に関して、「大町念仏講帳」享保二十年（一七三五）の項に次ぎの記載がある。

市場をめぐる対抗過程

一方より下衆人に無御座候其故へ去冬経てことく高値諸職人紅屋及び難儀候所四月九日二箇様より紅屋百四十八軒之者其販可申候而授り売買

不仕候様被仰付候年行司紙屋勘兵衛いせ屋理右衛門別而被呼出堅被仰付候仍而右之趣最上申来候而諸人難儀存候。
六軒「すあり」四軒として表れており、また年行司を立てていることからも株仲間を作っていたことが知られる。

こうして、京都の問屋または紅花屋が山形へ下って直買することが禁じられたのであるが、この時期が享保であるということと、三流後の次々の史料からこの買占の性格が窺える。

・・・当月京都紅花問屋中ノ御当所荷主仲間共方江書状到来仕候へ紅花之 نحو古来随一ノ出来ニ御座候処近来ニ至り出来不宜

 فى

第一節にも述べたように、独占を割りとする紅花栽培奨励に伴い、この流通を担当しその過程から利益を濫出する特権商人に対して、領主はこれら特権商人に仲間としての特権を与え、それより得た取引の利潤を或いは宮加金として、或いは広く用途として、取引する段階に至っているのである。この場合の領主は、二条奉行の背後にある幕府であって、享保の変革が貨幣経済の深化に伴う農民の余剰部分に対する幕府なりの対応の形態である、事実があり、貨幣経済のもたらし物価の騰貴に対して、特権的製造業者（紅屋・縄屋）が特権商人と組んで原料購入の安定化を図ったものといえよう。すでに全般的に成立していた紅花生産は、もはや余剰販売の性格を脱しておらず、ともかく販売目当ての恒常的な商品生産となっていた限り、たとえ高値販売を由って余剰生産部分が残らないことにしても、貨幣関係をめぐる対抗としては激突していく。京都におけるこうした特権市場に対抗する生
産地には、地元特権商人及びすでにみた農村内部の様々な階層関係の萌芽があったわけだが、この激突の主体者を分析しつつ、対抗関係の内容をみるとにしよう。

紅花問屋仲間が設置されたから僅か六年後、寛永元年（一七八）には次ぎの記録が出る。

「京都江戸商人相名代、甚右衛門藤助二郎応助寒江ちより、六郎兵衛五兵衛篠原侯があって、向後相正仲侯……」

甚右衛門以下の商人は、早くから商業町として知られた谷地町の商人であり、寒河江も多く行われる近在の商業の中心であるから、これらの訴人はいずも商業を主とした前期的商人の性格が強いものであった。そしてこの最初の問屋制廃止の開は、これら前期的商人間の流通利益をめぐるものとして現われたのである。少くともそのヘゲモノーは商人層にあっただろう。それは単に代表者が商人であったことばかりでなく、口銭廃止の面が強く意識され、後においてこのような取引手狭に相成るかからという意識はまだ明瞭でないことにでもみえる。訴えた願意が明瞭でないの

質問を認めなければならいないであろう。しかもなお、農民がこの争いの中に積極的に乗り出しないと

こころをみると、農民が直接に自分達にかかってくる紅花取引の影響を意識することが弱かったのである。それ
三月（一七五二年頃）には再び問屋制をとってきたようである。宝暦五年、前記の谷の商人を中心として、大坂の商人上屋屋に紅花問屋を立てさせる京都の株仲間の独占売買を破ろうとした事実がある。こ

には次の記録がある。

「大名紅花問屋拾四軒御取上罷成古来之通紅花出之国々江直下リ相成候様拾二拾五文置候……」

この事件の経過は詳かにし得ないが、さらに十年後の享和三年（一七六五）に花山かた上物拾五両拾七拾両延仕候……は拾五文置候……を残したが、これは後述の段階ではそれが明瞭に胚胎されていたのである。農民的要求はここでも依然としてわからないのであるが、もうこの段階ではそれは直段高直仕候

江戸中期における商品流通をめぐる対立（安政子）
といわれているように、農民は極めて強気に売り出すのである。その価格を見るとき、その前年には干花山形販売額は二万五千円、前々年は山形で二万五千円、前々々年は山形で二万五千円と記されているから、一躍二倍位に暴騰したのである。生花については前二、三年の記録が少ないので、宝暦末年でみると六〇、三〇文であるからこれまたあがつ、相立不申」という言葉もうなづけよう。生花の高騰は当然干花の高騰となって表われ、このため京着値段販売によって圧迫され、上の上方商人に対しては値段相立たずというようにして取引が円滑に進まない状態に追い込められたとすれば、この闘争の成果は専ら生産者たる農民の手にはいることになった。記録は農民の好況だけを伝えているのである。

京都の売屋十四軒は、これ以後仲間としては登場して来ない。しかしこのことが決して農民にとって商人資本に対する最終的な勝利を意味したのでなかった。価格だけみても四年以降生花の価格は五〇文を平均とするようである。干花の価格も二万五千円に抑えられていた。農村の好況は一年で終わったようにみえる。
市場をめぐる対抗とその限界 後年の記録によってみてれば、間屋制廃止後紅花荷宿が設けられて口銭はとらないが、売人買人を直談させないものであたったようだが、京都へ送った紅花は必ずここを通さなければならないかつたものか否かは判明しない。しかしそれもかく、直談させない取引の蔵には不正な点があるということを理由として、明和八年（一七七一）には江戸の大黒屋九左衛門が、京都に紅花世話所一ケ所を設け売買を直相対にし、史料からみては江戸大黒屋と地元の商人とどちらが先であっただかわからないが、幕領諸藩領にわたっておおよそ高揚村の商人佐五兵衛・五平治の二人であるが、この二人と大黒屋との間には連絡があつたとみえ世話所を設立したときの条件三ケ条が示されている。この願書に署名した村々が賛成した理由は、一、世話所ができれば取引が自由になるので百姓もよくなるだろうということ、二、低利貸金を与えるければ売急がず高価が待てるということ、三、高揚・谷地その他の印形があるから差支えないと思ったこと、の三点であった。これに対して多くの村々が
ら反対意見が出されたが、その理由は、一、直売買になってから百姓が不利になった事実はないこと、二、問屋

十四軒でも取引手狭であったから一軒ではより悪いこと、三、口銭をとられれば、地元商人がそれだけ廉价買う

ということ、等があらわれており、その結果前に顕出した村々も、前借りは引当紅花を廉値に叩かれるからということ反

省をして、願取下げるにいたったのである。

この前者の申立をみると、商人の利益は百姓の利益と同様に考えられ、それは高値・谷地の印があるからとし

て商人町であった二つの町を引き合いに出していることからもわかる。

東の紅花は山形の問屋から発送するのが慣わしであったほどの初期から商人問屋の集っていた所である。

谷地高棚の商人がそのものに集り、農業の名を連ねて運動を

起したるものとみられよう。しかも各村々の署名は、植者相関の三相成員会議無之候印付印形仕候為御相願

して無御相候」というもののであった。この願書の中には『余国之者顧人に相加り候由右二分申聞候』とあるが、江

戸大黒屋を中心とした一帯でいえば、願書に署名した村に二十一

これはに対して設立反対に立った村の数は圧倒的に多い。幕領二百十六ヶ村でいっぱい、願書に署名した村に二十二
反対七十二：紅花を栽培せずとした山村三十二となっている。反対した村は、低利金は農民に関係なく商人のみ利用できるものであることを、口賛のがかかるためあらゆる農業の不利として、口賛の代償たる低利融資の階級性をつをつけたのである。特に町人にとっては、在郷仲買業者と人連印のものであって、前に見たように在郷仲買業者は有利であることを述べて強硬に抵抗した。これらの場合、明和期では、村落での生産・政治面における主導権といえるか。反対理由にもあるように、当時、農民は非常な状況に追い詰められていた。少なくとも紅花生産の未熟期は、全国的に統一化されず、江戸特権商人に結びついた一部地元商人の運動によって、分裂されたのである。後年、農民自身がこの問題を省みて次第のようにいうに、当時、多数の農民は、何もしないで、幕府は明和九年七月には郡中各領仮代を江戸に集め、規律を以てして、世話所設置に関する請書を提出させている。しかしこの請書の中でいいたってもなお農民側は「恐忍愚昧之百姓存知寄，付」といって強硬に抗議し、最後に試みに一年だけ設置し期間内でも差障りがあれば世話所御免の訴訟を起こすということである。江戸中期における商品流通をめぐる対抗（安政子）
二年最終的に宿屋制を打破し、直売販による自由市場を求めた生産地も、幕府権力にバックアップされた新たな
特権商人資本の台頭によってその下に連繋した一部生産地商人を分裂させつつ再び特権市場へ押し込まれられて来
たのである。紅花世話所に対する反抗はここで終わったのではなかった。寛政十年（一七九八）の世話所の議定書
に於て郡中より三四人を京都に派遣し、その費用を世話所持ちとして監視するに至った。しかし世話所に対する「郡中」
の監視は益々強くなって、十年後の文化五年（一八〇八）には

「右世話所株式之罇を引受人両人之為相任候儀へ無御座郡中相持之仕右之仕法三面百姓不益之記も有之候へ、不限何時
とする郡中より三四人を京都に派遣し、その費用を世話所持ちとして監視するに至った。しかし世話所の廢止を
せずに、いわば妥協的に改変するだけであるところに問題がある。生産者農民の圧力ばかりを評価しておれない
のである。明和以降の仕切には大阪江戸の間屋商人の名が数多く表われるが、これはいわば京都間屋の独占だけを
破るものであって、天明五年（一七八五）には京都側からの提議によって大阪にも紅花間屋仲間（三軒？）が
作られ、慶応頃には西軒となった。これに遅れて文化十年（一八一四）に江戸十組問屋が公許された際、白粉紅
酒造家が襲われ、同六十年寒い江河では、八幡原に集合した「三ッ村百姓代高持」の連名で、同町市右衛門から夫食代千貫文を強要借用し、返済後も備荒米代として積立てておくことに成功している。市右衛門は当時「高八拾七石五斗六合、親族井作下男共家内都合十八人」という農村商人である。こうした高持・百姓代を先頭とする脈然たる一揆は、その典型を享和元年（一八○一）の「村山一揆」に見出し得る。

この年は不作米値騰貴して「細長頼困苦日にて富農の従々米穀を占買す」といわれている。紅花は「五月下旬より暮候得者百姓騒乱事も無之罷在候処紅花以外下直上一向上に買入無之」といわれ、この紅花下値米高値から一揆が合して解散、二十七日にも繰返したが、情報はまちまちで天童絹田藩は取扱がつかなくなった。二十日夜数合して解散、二十八日には東根、柳さや道に、後沢、伊野沢、天童の商家に対して米価引下要求もあり打壊しを行つた。しかも途中の村々で農民を糾合し、二十九日早鳩方三条目村の商人兼屋小八及びその縁戚を打壊し、旦にには山形県下に駆して城兵に激突したが退散せず、馬見ケ崎河原に陣して山形を圧し、用水路立切城内之吞水等不自由いたし候巧に而乱入之勢に相見え候と幕領代官にいわしみた。一方二十八日から北部の別隊は山口村伊藤家・若松村本寿院（明治六年小作米一六三俵）等を襲って、七月一日には山形に到着合流し「徒党之者共凡十一方余」といわれた。これに対して幕領三代官所・山形藩・天童藩・米沢藩、上ノ山藩、新庄藩はそれぞれ兵を出したのが、逆も荒立候ではなく更騒立候様にも可相成「付縦令不関諸候共理害申聞候外有之間敷被存候」としてその要求を聞き入れる。
ことになって終結したのである。

要求は、一米価引下げ、二実物料分引下げ、三油粕米糠の中賃禁止、四食米貸下であって、直接に領主に対する
領主が第四項を除いて他を認めたことによって解散したので、この一揆が商人
に対する闘いであった。しかも一揆に参加を要請した無名の同状が各村役人の手を経て伝達され、北郡の最も
山奥の次年子村で伝達すべき村がなく止まっていたのは、この一揆が村役人をと同義させるものであったので
あろう。また主謀者として処罰（遠島）を受けたのは山寺村の百姓二人である。

歴史家はこの激しい闘争に対してさえ遠島二人は過料銀（遠島）を経て伝達され、北郡の最も
止をみても、この闘争の原因は、生産者たる小前百姓にあたったことがわかる。在村仲買層は参加こそすれ直接の
敵とならんでいないが、要求の中にこの層をも排除せんとする生産者の力を認めなければならないことが
かえってこの一揆の最大の原因として米価問題となっているが、一般農民にとってそれが問題になるのは貢納と

夫食米であるが、こうした米の売買はこの時期にはすでに一般化していたのである。この米及び雑穀をめぐつ
て小前百姓が蜂起することを防ぐことは、天明三年より名主連合の下に郡中議定として行われたのである。

郡はこの頃幕府一預所六藩領一知行所に細分化されていたが、こうした領分を超えて郡中議定として行われたのである。

米及び雑穀をめぐつて、"江戸中期における商品流通をめぐる対抗（安積子）"
三、商人地主の矛盾的性格と推転方向

以下、別稿で詳論したいが、商人地主層の藩への連繋及びそれへの対抗の相矛盾する二面を指摘し、その推転

『藩専売制の失敗』
一般的にいってこれほど「国産第一」のものとして奨励され、また全国第一であった村

山地方の紅花生産が、ついに藩権力による専売制を成立せしめなかったこととは、藩権力の弱さによるものがある

しかし、在村間層の商品把握の強さを示している。紅花だけでなく、関していえば、

水戸藩は大坂に国産売捌所を設置して、紅花外五品の藩直売を行った。また同じく染料である阿波藍に対する德

島藩の統制はよく知られるところである。

山形藩においては、激しい領主交換が見られるが、専売制をもくろんだのは最後の領主であった木野藩の例し

かわかっていない。年号は不明であるが内容からみて弘化三年（一八四六）と思われる「山形御産物廻漕之儀

江戸中期における商品流通をめぐる対抗（安孫子）

三七（四）文政八年議定は「山形県史」巻三五九四～六〇〇頁。天保七年は同七六三～七七七頁。
付書付
は、国産第一のものは紅花であるが、と書き出している。しかし、藩専売制の困難な条件として、元方荷主の御用達長谷川吉郎次村居清七佐藤利兵衛福島治助此四人ら之家業、御座候何れも相応之富豪、御座候御領主之御威光、而毛容易に変革相成兼候事奉候、前条四人、之を御恩沢を篤事薄ぐ、御用相従候も自然踏止兼候事奉候、
等を挙げ、彼等之利潤増増候、矢張御領主之御蔵之実候道理、奉候、等と立著するに止まるのである。直接に生産そのものを把握することなく、当時の大野藩が主として山形に居住する商人・見野だけを問題としている。これより白木綿市万反を回送し絵染にした、上方の商人に対して全く無力であり、直接に生産そのものを把握することなく、当時の大野藩が主として山形に居住する商人・見野だけを問題としている。これより白木綿市万反を回送し絵染にした、上方
へ廻せば国益になると積極的に述べているのが注目されるが、これも実行された模様はない。大野藩としては、

これら商人層を利用して全く無力であり、直接に生産そのものを把握することなく、当時の大野藩が主として山形に居住する商人・見野だけを問題としている。これより白木綿市万反を回送し絵染にした、上方

大野藩の財政窮乏は、後に他領の商人地主層からも臨時御用達に取立て借金するに至るのである。
二

商人地主層の特権化

本来、その機能として藩と連携することなく、一部取村役人たる資格で権力の末端部分を代行していたにすぎなかった商人地主層は、それ自身に封建制を堀り崩す要素をもちながら、反面権力との直接的連繋をもつに至る。異質的機能をもつとはいえながら、村落の支配者、封建的共同体の支配者としての直接的連繋の過程であった。

封建領主の機関に組み込まれていたこの層が直接的に特権化していったことは、それ自身封建制の、補強ではある。

この直接的連繋の例を三つの点でみよう。第一は、主として農民救済をもって表彰され苗字帯刀を許される型をみてわかるように。藩がこれを奨励し、した恩恵を与えなければ、本来の自分の基礎が危くなるのである。しかもそれが改めて表彰される必要のない当然のことであった。

大蔵村の稲村家は宝暦頃から土地を開墾し、居村に七十六、七石を有し、文政期には下男十四人下女五人、寛政期には家内二十七人で「貞実＝農業」を営む。稲村家は寛延二年村内百姓へ百五俵を無利子五年賦で貸与し、江戸中期における商品流通をめぐる対抗（安孫子）

「封建的」な村落支配者としての性格を稀薄にしていることに原因があった。これを具体例のなかでみよう。
宝暦四年七月廿九日
村中一統近村近茂同様に貸与け、困窮者から代金を全くとらず証書を返した。の為、「百姓共力を得他国出助の無し」、天明三年村の上納米を一手に引き請け、翌年は村内に六百俵を無償で
六十五俵を五年賦無利子で差出し、さらに百二十両を投じて安栄を施しつつある。このときも代官から銀五枚を「褒美」として賜っている。さらにこの頃から作馬五馬、六十頭を貸へて「村内を無高百姓に施し、毎春五穀成就の祈穀を行っている。表彰される前の寛政四年には、郡中倉荒米資金を設け
事項と共に、単にそれのみでは申し切れない他村他郷ならびに郡中全部を及ぶ明治期の地主を思わせる要素が表われている。この結果苗字帯力を許されるのであるが、この中には封建的な・小共同体の親方としての・救助要素が带びている。勿論そうした要素が近代的といえるものではないが、商人地主として押し上げられた地位の恩恵を強制されたのである。その恩恵がなお自己の地盤において行われている限り、それは当然小前百姓の義務を前提とする。そのことはまた封建的共同体が崩れつつもれぱや共同体として見分け難くなっているに拘らず、支配者を変質し、共同体をかかける方向に分解させたのは、農民の一貫した自立化過程・商品生産の深度によって。
こうした例は、柴橋村安孫子伝四郎家、黒沢村渡辺久右衛門家、八銃村工藤八之助家、漆山村半沢久治郎家に存在する。江戸中期における商品流通をめぐる対抗（安孫子）

三、藩権力との対抗面

商人地主層と領主との連携が、本来封建制に対する否定的異質的要素の上に行われた

註　（一）東村山郡大巖村「稲村家文書」による。今田氏より借閲。

（二）『東村山郡史』巻四三九（四一頁）

（三）長井政太郎・工藤定雄著『近世における地主の発達』（山形大学紀要第4号）四一頁四四五頁、なお半沢家の事例

（四）同右「水野家文書」「書上」による。"
モノ・藩からいえば商品経済化に伴って分解する封建農民の維持固定の対策の上に行われたものとすれば、商人地主の機能はこの連繋の中に矛盾をもつてる。商人群体層は、それ自体農民の分解の促進者であり、また自らの危機を内攻・深化させていく。その具現化した例は、藩財政がこの層と連繋するに止まるかぎり、ますます領主財産の増加による不祥農民の不安定である。藩財政をここで論ずる余裕はないので、より端的に表われた小作化の點について指摘しておく。

永代賃地の禁令が、江戸中期以降事実上空文化し、当地においても時小作地が増加したこと、それ以上に他の地方においても小作地が増加したしたこと、それ以上に他の地方においても小作地が増加したこと、それ以上に他の地方においても小作地が増加したことが従来の傾向・慣制をもつって現われるのである。地主としての封建領主との対立面は、ここから生ずる。ここでは一例として藩権力による賃地取戻しの例を挙げて、その集中的表現をみよう。
これは片谷地村右衛門から渡辺家に出した文政二年（一八一九）の質地証文であるが、渡辺家は十九歩の責

店主五検九合だけを負担し、作徳米二俵一斗余に対する土地の実面積は隠されているのである。こうした方法が

後二階を余し、残余の二十四俵が純然たる地主取分となり、貢納が質入人の責任に残されたことは明瞭である。

越石に対し、地主は約八十二石分しか貢租負担をしないため、水野対渡辺の關係は、とくに他領にまたがる場合でもあり、水野藩は元金分千五百両を貸してこの質地を取戻

の矛盾は明らかにあろう。しかも渡辺家は前項の如く水野家に臨時の用達を行っていたのである。

水野藩と連繋する物質的基礎及び対抗する物質的基礎について具体的にふれただけだが、これを明らかにすることが幕末明治初期という過渡期の問題を現実的に解明すること
通過程のみを取り上げてみた。しかし、それでもこの中的各項が、さらに実証的に深められ、展開されなければならぬ点を有しているので、結局、この稿全体が、単なる見通しにすぎなくなってしまった。それゆえ、ここでは一切ふれないで、自説の見通しを立てることにとどめた。それは、現在準備している生産過程等の諸論点にとども、ここでの問題をも展開しながら、統総で果してゆきたいと思う。

安孫子 麟
東北大学 助手

執筆者 紹介
田中菊次 東北大学 大学院研究員
庄司哲太

研究年報『経済学』第三十二号
一八

『退記』